

クリスタル

だれももらってくれる人がなく、クリスタルは鎖につながれアークに連れてこられました。クリスタルは生後2カ月になるかならないかで、母親は紀州犬でした。そのときの私たちには知るよしもなかったことですが、その後彼女は紀州犬の忍耐強い性質の全てをもって、身にふりかかる壮絶な試練を耐えねばならない運命にあったのです。クリスタルは見知らぬ人には痛々しいほどびくびくしていましたが、他の子犬や信頼する人たちには、いばってみたり大胆だったりしました。

ゴールデンウィークの始まりとともにアークには大勢の人が訪れ、ここの子犬たちは皆もらわれていきました。しかし生後6カ月のクリスタルはもらわれませんでした。彼女を受け入れて本当に可愛がってくれる家庭は、全く見つからない用に思われました。そこに1人の母親が年若い娘と一緒にやってきて2人はクリスタルの里親になり、彼女のために時間をかけて人を恐れない用にさせていく決心をしたのです。クリスタルは新しい環境におかれると恐れるあまり逃げ出そうとするので、庭に出したり散歩のときは注意するように、私たちは2人に再三言っておきました。ようやくクリスタルをもらってくれる家庭が見つかったのです。

翌日の午後、前日の母子の車が来てアークの前に止まりました。私はすぐに何かあったのだわかりました。娘の方がクリスタルを散歩させていて、彼女が大変おとなしかったのでリードを外したということでした。これこそクリスタルが待ちかまえていたことで、彼女は逃げ去ってしまいました。私たちはすぐにその場所に行ってみました。そこは森のような所で、そこでクリスタルを見つけることは、広大な砂漠で針を捜し当てるようなものでした。私たちがただただ望んでいたことは、クリスタルがアークに戻って来ようとしてくれることでした。彼女は名前と住所を書いた小さなプレートは付けてはいましたが、誰かがそれが読めるほど近づけるなんてことはまずありえなかったことでしょう。

6日後その母親からの、クリスタルが傷をおった姿で保健所に発見されて、家に戻って来たとの知らせが留守番電話に入っていました。すぐに彼女に電話をしてみると、彼女が言うには、明らかにクリスタルは山を越えてアークに戻って来ようとして、道路際で発見されたのです。彼女はすでにクリスタルを、ある大変評判の悪い獣医に連れて行ってました。しかしクリスタルの傷の様子からして、すでに夜遅くになっていましたが、彼女にどんなことがあってもすぐにクリスタルをアークに連れてくるように言わねばなりません。

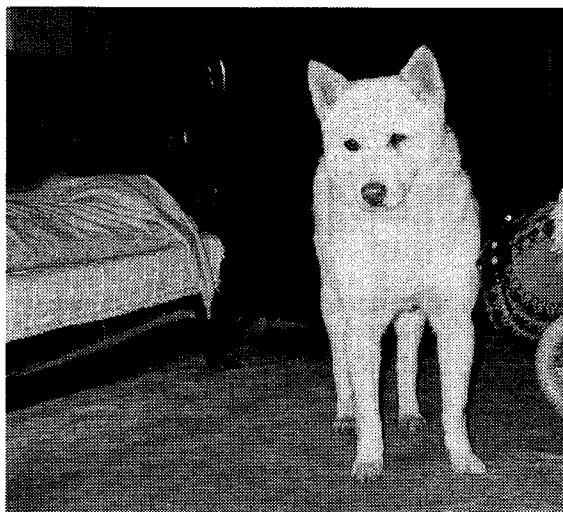
私がクリスタルを車から抱いて出したとき、彼女は私の手をなめました。そしてひどい傷を受けた彼女の顔を見た時、私の心

もひどく傷つきました。そのひどいけがをした眼を見た時、私には彼女が眼球を失っていて、もうその眼では決して何も見えないとわかりました。しかしもっと恐れたことは後ろ足の麻痺でした。その獣医によってクリスタルは、わけのわからないものをあれこれ飲まされていて、私は必死で彼女を後ろ足の裏を押さえてみて、痛がるなどの反応があるかどうか試しました。しかしそこをいくら押さえてみても、何の反応もありませんでした。考えたくないことが、ふと脳裏をかすめました。安楽死しかないのだろうか。しかし再びクリスタルをみて足のそこを押してみると、少し反応があったように思われ、かすかながら望みがあることがわかったのです。その人はその夜帰ったとき、その後は全く何の連絡もありません。

不幸中の幸いともいうべきでしょうか、その少し前に私たちは、24時間営業の動物病院をやっている、ある腕のいい獣医師のことを聞いていました。すでに12時に近かったのですが、他にあてもなく、その獣医さんに電話してみたのです。その方は是枝先生と言うお名前ですが、もしクリスタルを連れてこれるならば、何時になっても診察するとおっしゃって下さいました。先生の病院は藤井寺市にあり、アークからは車で2時間かかりますが、日が変わった木曜日の午前1時頃、クリスタルは先生に診てもらったのです。レントゲンではクリスタルの背骨は5センチずれてしまいましたが、脊髄が損傷しているかどうかはわかりませんでした。手術はその日の夜に行われることになりましたが、私たちは本当に悲しいながら、もし脊髄が損傷しているならば、先生にクリスタルを麻酔からささないで、眠らせたままにしておいてと決心していました。是枝先生の精妙な手術は5時間かかり、脊柱が脊髄を圧迫していたものの、脊髄は切断されてなかったのです。その手術でピンにより脊柱を固定することなしにはクリスタルは決して再び足を使えなかったことでしょう。

クリスタルの脊髄はもろく、ピンは脊柱をとめておくことができなかったのですが、すぐにまたその位置を変える手術を受けました。彼女には体を動き回らせないようにする金属性のコルセットが装着され、脊髄が治る可能性が出てきました。4週間の後、私は是枝先生の病院でクリスタルと対面していました。しかし彼女は少しも歩こうとはしませんでした。そこで先生に頼んで、クリスタルをアークに連れて帰る許可をもらいました。アークは彼女が唯一自分の家だと思っているところですし、私たちがあれこれやってみてクリスタルを歩かせるのが良かったからです。

クリスタルがアークに戻ったときには、



あの悲惨な事故から6週間近くが過ぎていました。すぐにリハビリが始まり、毎日私たちはクリスタルの足をマッサージし、彼女を立たせて、もう一度歩けるようになるうと言いつけていました。それは文字通り、時間との闘いでした。なぜならば何週間もの間体を動かしていなかったことで、筋肉の損傷が激しく、すばやく元に戻さないと、立ち上がるのに必要な力がクリスタルには決して出なかったことでしょう。まして歩くなど、とても無理だったでしょう。

クリスタルはその訓練が彼女に与えたに違いない苦痛にも耐え、大体においては嬉しそうで愛情も示してくれました。しかし時には、もどかしさや苦痛の表情で私を見たものでした。やはり顔にはそういった気持ちがでていたのです。クリスタルはそんなに勇敢に生きようとしたのですが、こんな事態こそ起こらなかったらよかったのに、と思う暗い日もありました。しかしそれは数える程でしかありませんでした。クリスタルは一生懸命歩こうとしましたし、時々早く歩こうとして自分の足につまずくこともありました。しかし数週間後、クリスタルは助けなしで立つことを習得し、彼女の尾は必死にバランスをとろうとする時に大きな助けとなりました。疲れてしまった時にはしばしば、足を引きずったりしましたが、そんな時は彼女の名前を呼びさすれば良かったのです。すると彼女はしかられた子供のように立ち上がったものでした。

2カ月以上が過ぎ夏が近づいていました。そんなある日私はキッチンにいたのですが、窓越しに外を見るとクリスタルがやってきて、操り人形のように歩いていたが、歩いているのです。その瞬間私は、クリスタルのためにと私たちが決めてやってきたことの全てが正しかったのだとわかりました。なぜならばクリスタルは、日本の他の犬達が羨むような資質を持っていて、本当に幸せになったからです。

アンマリー・マクギバン談